

22. 回転脱穀機・千歯扱き

刈り取って干し終わった稲束からもみ粒をはずす作業を「脱穀」と呼ぶ。晴れた空にガーイガーイと響く足踏み式回転脱穀機の音は、ひと昔前の秋の風物詩だった。

回転脱穀機は発明農具の王者

A は回転脱穀機。足踏みミシンのように踏板を踏むと回転ドラムが向こうに回り、稲束をさしかけるとドラムに植え込んだ逆 U 字形の針金の列が籾粒をはたき落とす仕組みになっている。回転脱穀機は明治 18 年頃から開発が始まり大正期にほぼ完成を見た。

初めは千歯扱きを回転させるというアイデアからスタートして、村の発明家達が式と銘打って特許や実用新案に申請を繰り返し、逆 U 字形針金方式に落ち着いた。回転脱穀機は近代日本の発明農具の代表とするにふさわしいヒット商品である。

ドタの脱穀は農家の庭で

脱穀作業は乾田では田で済ませたが、ドタでは農家の庭に持ち帰っての作業となった。では回転脱穀機が出るまで、どんな方法で脱穀していたのかを振り返っておこう。

臼と杵で脱穀した弥生人

弥生時代の人達は石包丁で摘み取った稲を乾燥させ、穂のまま木の臼に入れて長い棒状のたてぎね（堅杵）でついて脱穀した。東南アジアでは、早起きの主婦がその日に炊くだけの量の穂を臼に放り込み、堅杵で精白までやってしまう、というのが参考となるう。

手扱き、コキダケ、コキバシ

江戸時代に千歯扱きが発明されるまで長らくコキバシ（扱箒）が使われていたというのが学界の常識だが、扱箒の言葉も絵も中世の史料には見つからない。人々は長らく手か、せいぜい扱竹で籾をしごき落としていたようだ。B は手扱きで、堀家本「四季耕作絵巻」の原図は 16 世紀。C はコキダケ（扱竹）で「和漢三才図絵」（1713 年）の図。

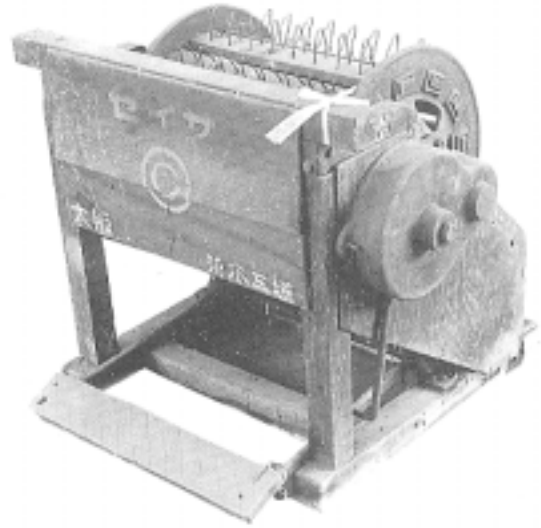
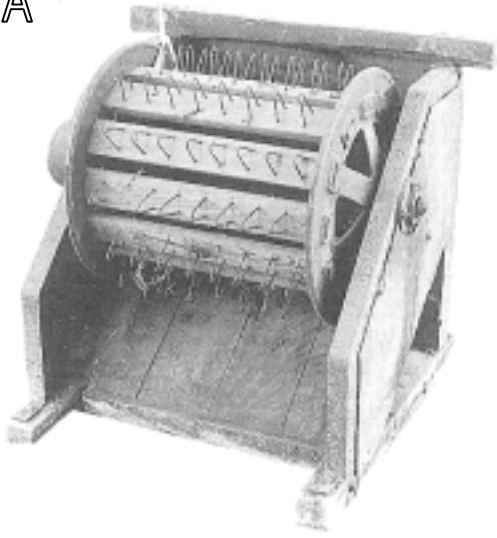
D が扱箒で、「農業全書」（1697 年）の口絵。扱箒の描かれた古い例である。

千歯扱きは江戸時代の発明農具

E は「摂津国各郡農具略図」の「稲扱、カナゴキ（金扱）」で標準名はセンバコキ（千歯扱き、千把扱き、千刃扱き）。元禄時代に泉州高石の大工が発明し扱箒の 10 倍の能率のためパート労働が必要となって「後家倒し」と呼ばれたという発明農具の代表格。

F の千歯扱きは混鋼鉄製で、歯を 3 ブロックに鋳分け前後から取り付けた特許品。この形で売買され脚は自分の家で取り付けた。ところで回転脱穀機では籾が割れる。「種籾だけはカナゴキを使った。丁寧な人は手で扱いていた」（千里丘）という。

A



B



C



D



E



F

